筑紫女学園大学リポジト

不安への対応 ― 自閉症の子どもの現象学的考察 ―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 公開日: 2024-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000014

不安への対応

― 自閉症の子どもの現象学的考察 ―

中　野　桂　子

Coping with Anxiety: Phenomenological Considerations on Autistic Child

Keiko NAKANO

はじめに

自閉症ということばが耳目にふれることがある。そのことばは何となく分かり難い。自閉であるから自開に対するものである。すると、自閉症に対する自開症というものがあるのではないか。この問いは、答えの見つからない問いであるように見える。けだし、自閉ということばは、人間のある現象に当てられたことばであって、それは解体・分節できるものではなく、しかも一義的に定義できるものでもないからである。だが、そうであっても、人間には意味志向する意識がある。たとえば、人は路傍の石ころにさえ宇宙の深玄な意味を見るように、ある人間の現象にも何らかの意味を賦与するのは至極あたり前のことである。自閉症ということばも、人間のある現象に賦与された意味のひとつである。

それでは、自閉症と称される現象はどのようなものであるのか。本研究は、その現象を見るために自閉症者・東田直樹の手記[1]を用いている。わが国には、自閉症者の手記に、森口奈緒美、ニキ・リンコ、泉流星などのものがあるが、東田直樹の手記は、その分量が多く、幼児期から青年期に至る経験が綴られており、しかも重度の自閉症が見られる。これが、東田直樹の手記に着目した所以である。

手記には、日々の生活経験が具体的に綴られている。

いつもと違う状況で会うと、その人が誰なのか、認識することが僕にはできません。[2]

でも僕は会話ができません。生まれてこれまで、両親にさえも、会話で自分の気持ちを伝えたことはないのです。[3]

手足がいつもどうなっているのかが、僕にはよく分かりません。[4]

どこに行きたいわけでもないのに、目についた場所に飛んで行きたくなる気持ちをおさえられません。[5]

しかし、いまだに僕は人の足を踏んでも分からないし、人を押しのけても分かりません。触覚にも問題があるのかも知れません。[6]

僕は、何か失敗すると頭の中が真っ暗になります。　泣いてわめいて大騒ぎ、何も考えられなくなってしまうのです。[7]

手記にあげられていることは、いずれも、生きることを困難にする否定的なことばかりである。これが「症」であるとされる所以であるが、しかし、この現象は生の否定ではなく肯定を現していると見ることもできる。周知のように、神経生理学は、自閉症と称される人びとの疾患を探り当てようとしていて、たとえば、会話ができない言語障害の原因に、ブローカ野（運動）とウェルニッケ野（感覚）をつなぐ神経線維（弓状束）に障害があり、そのため情報の連絡がとどこおっているという。fMRI 検査はこれだけのことはできる。さらに自閉症には、神経分泌細胞（視床下部の室旁核・視床上核）から産出される神経系ホルモン（バソプレッシンとオキシトシン）のオキシトシンが何らかの効果があるともいう。だが、疾患ないし不具合が明らかになることがそのまま自閉症の解明になるわけではない。自閉という症状は、ある種の疾患のある人が生きる姿、すなわち疾患に能動的に対応しようとしている現象であるということができる。かくして、本研究は、東田直樹の手記に疾患に対応しようとしている現象を見る。その現象に意味を見出すのが本研究の課題である。

すでに見たように、東田直樹の手記には、健常な人と対比して「できない」「分からない」と、自分ができないことが綴られている。ここには、健常な人たちへのねたみや欲求不満も人びとの同情を求めることもなく、ただ症状を知ってほしいという願いがある。ここには、自分が話すことができず、何をするかも分からず、不安であること、その不安と向き合い、それを耐え凌ぐ姿がある。東田直樹にとって、不安は一過性のものではない。それは終生続く。それゆえ、東田直樹において、生きることは不安への対応である。これが本研究の表題を「不安への対応－自閉症の子どもの現象学的考察－」とした所以である。なお、本邦において、不安を主題とした研究はほとんどないので、自閉症についての何程かの知見が得られれば幸いである。

1. 安心感

ポルトマンによれば、人の新生児は胎外胎児、すなわち未熟児として生まれるのであった[8)]。このため人の新生児は、他の霊長類、チンパンジーなどの新生児に比べると無力に近い。身体には、たよりげなく、よわく、こわれやすさが現れている。子どもの現象学的研究によれば、乳幼児は安心、安全、庇護を求めているという。たとえば、ランゲフェルドはこう語る。「子どもがわれわれに求め、期待しているものとは何であろうか。それは、第一に彼らの弱さの保護であり、彼らの不足や自然的な欠損の補充である。」すなわち「たとえこの世に何が起ころうとも、わが家の中では安全である」[9)] という安心感を子どもは求めている。この安心感をボルノウは被包感（Geborgenheit）と称し、それはまず母親によって生み出されるという。

> 母親は、その子どもを気づかう愛情のなかで、信頼できるもの、頼りになるもの、明るいものの空間をつくりだす。その空間へ引き入れられているものは、すべて所を得、意味をもち、いきいきとなり、親密で、身近かで、親しみやすいものになる。[10)]

母親に庇護された平穏な生活が子どもに安心感をうむ。また、ヴァン・デン・ベルクは、日常のさりげない静かな落ち着きが安心感になることを具体的に語っていた。

一般に物事を行なう際のその安心のできる仕方、たとえば家の掃除の仕方、母親の台所での立ち回り方、来客を歓迎する仕方、そして父親が座ったり、肉を切ったりする仕方、……等々にまつわる安心感を、子どもは求めている。こうした、子どもには何の関係もない平凡な事柄が、子どもを安心させる。[11)]

さらに、ラッセルは自分の育児の経験から次のように語っている。

子どもは、その弱さのゆえに安心できることを求めている。[12)]

安心感をもって人生にたち向かう人は、不安感をもって人生にたち向かう人よりもはるかに幸せである。……もしあなたが、断崖に渡してある狭い板の上を歩いているなら、あなたは、もしこわいと思ったら、そう思わないよりももっと落ちる危険がある。[13)]

このような安心感は、わが東田直樹にも生まれていたはずである。どのような子どもも、生後数カ月の間は自他未分化ないし癒合の世界にあり、1歳過ぎ、自分の名まえを知り、ことばを覚え、自我が芽生えるまでは、家族の愛によってほとんど一様に安心できる世界を生きている。ただ、わずかに東田には他の子どもとの違いも現れている。東田の母親は語る。

9～10か月になっても人見知りもせず、誰にでも抱っこされていました。

一人遊びもするし、人なつっこい良い子だと思っていました。

歩き始めるのは遅く1歳3か月位でした。それまでは、はいはいでいろいろな所を動き回っていました。

あいかわらず人見知りもなく、私を探す事もありませんでした。呼んでも振り向かないのに、好きなビデオの音が聞こえると、遠くからでも走って見に来ていました。[14)]

東田には、普通の子どもに見られる不安がない。見知らぬ人に出会うと不安そうな表情を浮かべる人見知り、母親の姿が見えないとベソをかく子、幼い子は母親や家族の者が近くにいると安心して遊ぶが、見えないと不安になる。自分を見守り、応援してくれる人を子どもは求めている。だが、東田にはそれが見られない。東田は安心を求めていないのか。

2. 不安

幼い子どもは、安心を求め、安心できると安んじて遊ぶことができる。安心は自分を見守り、庇護してくれる人がいる世界にある。東田は、この庇護してくれる人を求めていない。したがって、東田は人がいない状況で遊ぶことができる。

東田の手記には、1歳、2歳、3歳、4歳のときの顔写真がある[15)]。いずれも、あどけなく、かわいい顔をしていて、誰もが手をさしのべ、見守りたくなるものである。ただ、どことなく、人に向かって訴える表情が乏しいように見える。目は前を向いているが、半ば閉ざされているようで、何が見えているのかはっきりせず、むしろ内向きで、淋しそうである。口もとは開いているが、ほがらかに笑っているようには見えない。もの静かな顔である。ここにはかすかな不安が現れている。この不安は何かを求めていて、しかも、それは一過性のものではなく、普通の子どもに見られるものとは違う何かである。この不安は、自分を庇護してくれる人の存在ではなく、そういう存在の外側にいることの漠然とした不安であるように見える。

不安は成人にも現れる。成人の不安については、たとえばキルケゴールが『不安の概念』におい

て、実存的不安として探求したものであった。ほとんど、人は自分の生があるかぎり、死の不安のなかで生きる。死は、いつ訪れるか分からないのであるから、日々刻々、生は死と隣り合わせである。その限りで不安はつきまとっている。フロイトは不安をノイローゼという精神の病理のなかで取りあつかっていたが、本来、不安は健常な人にもある。ただ、フロイトが述べていたように恐れと不安とは違っている。「不安は状態に関係し対象を度外視しているが、恐れはまさに対象に注意を向けている」[16] からである。およそ、恐れは、ヘビが恐い、大雨が恐いというように、具体的なものに対して現れる。物であるから、これは知ることができ、対処する手立てを打つことができる。手立てがなければ安全な場所へ移ることもできる。だが、不安は物として対象化されない。これは、物以前の状況、すなわち「こと」に関わっている。幼い子どもは母親など親しい者の姿が見えなくなると不安になる。見守ってくれる人が見えなくなるとき、世界は秩序を失い、何が起こるか分からないものに変貌するからである。すなわち、頼る者を失ったとき、子どもはたんに頼る人がいないから不安になるのではなく、世界そのものがカオスとなり不安を生み出すために不安になる。子どもにとって、母親のいない世界にいることは不安のなかにいることである。この不安は知る対象ではないので、これに対応する手立てはない。不安は、母親の姿が現れたとき解消される。世界が秩序を回復したからである。

人は、自分が究極において寄るべない身であることに気づいたとき、不安に見まわれる。これが死の不安である。もちろん、その身自体が生きている間に瓦解し始めるときにも不安が現れる。精神の病を生きる人にその現れがある。そこには、血の気のない、かたく、つめたい表情がある。瞳はうつろで、目はすわっているが、何かの対象に注意を向けているようでもない。当人においては世界が瓦解し始め、不安として現れているのであろうが、世界ではなく当人自身が不安として現れている。当人の不安に世界が呼応して不安を現す。こうした不安は精神の病によるものであるが、これに対処する手立ては容易に見つけだすことができない。この手立ては、当人が見つけ出すことは難しい。その手立てを見つけ出すべき当人の精神が病んでいるのであるから。そうであれば、健常な人びとの助言、支援、治療が要る。

わが東田には母親の姿が見えないときでも行動は活発で明るい。もちろん、自我が瓦解し始めている精神の病の人にあるような不安は東田にはない。東田には重度の統合失調症者が終日全く無為に過ごしているような現象はない。東田は、動きまわり、跳びはねる。しかし、それでも、何か不安気で、暗いものが表情に現れている。

3. 安心を産むもの

東田には、家族や自分に身近な人たち以外には他者が人として知覚されていない。他者があるとの意識はあるが、それが東田には具体的なものとして現れていない。そのため、人の表情が見えないどころか、他人を押しのけても、脚を踏んでも分からない。この場合、何かを押しのけたとか、踏んだとかの意識はあるのか。それとも、何かを押しのけたとか、踏んだとかの意識さえもないのか。東田には「手足がいつもどうなっているのかが、僕にはよく分かりません。……触覚にも問題

があるのかも知れません」と語っていた。これによれば、東田においては他人そのものの意識がない。それゆえ、他人の身体を押しのけたとか足を踏んだとかの意識もない。東田にとって、他人は、人としても物としても存在せず、空白になっている。それは、たんなる空間としての空白ではなく、ないこと、いわば無である。無には対処する手立てがない。予見することも知ることもできない。この無から不安が湧出する。この不安は、他人ではなく東田の身体に広がっている無が湧出する。これは、精神の病にある人の自我の瓦解ではなく、わが身の瓦解による。それゆえ、この症状は、精神の病以前の、本源的なものの欠損に基づいている。東田は語る。

手足がいつもどうなっているのかが、僕にはよく分かりません。

僕にとっては、手も足もどこから付いているのか、どうやったら自分の思い通りに動くのか、まるで人魚の足のように実感の無いものなのです。[17)]

精神の病の人の場合、自我の意識が瓦解して世界が不安に変貌するのであったが、東田においては、わが身が瓦解して身の置きどころがなくなってしまう。それによって意識は宙に浮き、消滅する。このときの不安は並の不安ではない。東田は語る。

僕は、いつも体が動いてしまいます。じっとしていられません。じっとしていると、まるで体から魂が抜け落ちてしまうような気がするのです。不安で怖くていたたまれないのです。[18)]

行動のコントロールが難しい状態が、どれだけ不安で心配なことなのか、普通の人たちにはわからないと思います。[19)]

東田に現れる不安は、統合失調症やてんかん、あるいは視覚・聴覚障害者や肢体不自由者の不安とは異質のものである。ただし、東田の症状には、動かずにはいられないということがある。そこには、むしろ動くことにおいて心と身体を統一して、わが身を蘇生しようとする姿が垣間見られる。

東田が必要としている安心感は、普通の子どもが求めているもの以前の安心感である。したがって、不安もまた特異なものである。これに対処する手立ては、愛情に満ちた母親でさえも容易ではない。母親にできることは、普通の子どもに対するように、東田のすべてを無条件に受け容れることである。東田は8歳（小学2年生）のときの状況をこう語っている。

とてもくるしい心は、おしつぶされそうになります。かなしくてどうしようもなくなると、泣いて泣いて、ぼくは大あばれします。とにかく泣いて心をかるくしなければ、ぼくはへんになってしまいます。こんなに体が大きくなったぼくを、小さいお母さんが、しっかりとだっこしてくれます。

ぼくはお母さんをたたいたり、かみをひっぱったり、ひどいことばかりやります。

お母さんは、やさしい目でずっと、ぼくをだいてくれています。これはとてもたいへんで、気がつくといつも、1時間いじょうたっています。

つらいときは、お母さんもつらそうなのに、いつもおわったあとは

「なおちゃん、すっきりしてよかったね」

と、うれしそうにいってくれます。[20)]

さらに東田はこう語る。「心をくるしめているものは、自分の力でとりのぞかなければなりません。お母さんは、それをささえてくれます。」[21)]

東田が語る「心をくるしめているもの」「とてもくるしい心」は、身が瓦解し自己が抑圧され、

世界との交流が断たれ、世界も破壊される現象を語っている。心をくるしめているものは身の瓦解であり、とてもくるしいこころは自分の崩壊である。暴発するパニックの症状はそのことを現している。だが、この症状は、身の瓦解―自己の疎外―パニックといった原因－結果、いわば一連の連鎖反応を語ってはいない。この症状そのものが東田自身である。東田は「とにかく泣いて心をかるくしなければ」とか「心をくるしめているものは、自分の力でとりのぞかなければなりません」と語っているが、これは東田が症状を対象化して、客観的に説明しようとしているのであって、症状そのものが語ることを明らかにしているのではない。東田においていえることは、パニックの症状が、身の瓦解、自己の疎外、世界との断絶となって現れているということである。ここには、身の焦熱・燃焼がある。そして、焼け尽くされたあと、苦しみは鎮静し、浄化され、身が蘇生される。東田は「とにかく泣いて心をかるくしなければ」「心をくるしめているものは、自分の力でとりのぞかなければ」と語るのは、このパニックが産み出す浄化のことを語っている。したがって、パニックはたんなる苦しみではなく、この浄化に至る現象である。東田は、こういうパニックの只中に入り、そこに身を委ね、パニックそれ自体となって現れている。この現象の中に身の再生がある。これは、得体の知れない疾患と対決する東田の姿である。

東田のパニックの症状はてんかんの患者が、症状が勃発するのを、あたかも待っていたかのように予感し、突然その気圏に巻きこまれるや、めくるめく激流の渦中に吸引されるのに似ている。だが、てんかんの症状には、身の長時間にわたる激動はない。てんかんの症状では、周囲の人も巻き込まれて、長い時が経ったように感じられるが、それは一瞬である。ちなみに、木村敏はてんかんについてこう語っている。

> 発作の襲来と終結はきわめて突然であって、日常性内部での時間の秒単位で経過したものなのか、それとも数分を要したものなのかについての的確な報告をしてくれない。一般には、時間は実際よりも長く見積られる。[22)]

しかも、てんかんの人には発作を期待し、そのときの高揚感を楽しんでいるかに見えるところがある。他方、東田の症状には長時間のパニックも見られる。ここでは、安んじて症状に身を委ねることのできる安心感が求められる。東田は語る。

> 昔の僕は、出口のない真っ暗なトンネルの中にいるようでした。どんなに困っていたか、悩んでいたか、誰にもわからなかったでしょう。
>
> 僕の望みは、ただ抱きしめて「大丈夫だよ」と言ってもらうことでした。そうしてもらうことができて初めて、人間としての一歩を踏み出せたのです。[23)]

東田の症状は終生続く。パニックが現れるとき、母親のように見守ってくれる人がいつもいるわけではない。東田は誰とでも会話ができない。母親など、家族の人たちは東田のことをよく知っているので、何があっても受け容れる。だが、他人となるとそれは別である。東田にとって他の人びとと共にいることは不安となる。たとえ身の暴発がないとしても、ことばの暴発がある。東田は語る。

> どんな言葉がいつ出るのか、自分でもわかりません。昔覚えた絵本の一節、繰り返し聞いたコマーシャル、記憶の中で印象に残っている単語などが、勝手に口から飛び出してしまいます。口を閉じてと言われても、

静かにできるのはそのときだけで、口を閉じ続けることも難しいです。[24)]

東田にとってもっとも不安であるのは、他人のなかにいるときである。ここでは、暴発する身の燃焼は他者への侵襲になる。そうであれば、他の人たちに関わることを避けるしかない。東田は語る。

ぼくは　一人でいたかったわけでは　ありません。　そうしなければ　自分が　何をしでかすのか　人から　どう思われるのか　こわくて　こわくて　どうしようもなかったのです。[25)]

東田は、ひとりで過ごすようになる。ただし、うつ病や重い統合失調症の人たちのように、じっとして動かず、終日無為に過ごすわけではない。つくねんとして、何かぶつぶつ口ごもっているのでもない。東田は動いて、自然の中へ赴く。自然が東田にこちらへ赴くよう招くからである。自然は、東田のすべてを受け容れるので、東田は自由になる。つきまとって放れない不安が自然の中で払拭され、安心感が現れる。東田は語る。

僕は、これまでずっと自然を自分の友達だと思って生きてきました。自然はどんな時も変わらずに僕を受け入れてくれたからです。

僕は、悲しいとき嬉しいとき、必ず山と空を見ます。言葉で話さなくても、自然は僕の心を優しく包んでくれます。[26)]

自然と東田の間にはふれ合う関わり、いわば対話的関係がある。この関係は両者が対象化されず、癒合して、それ自体となることである。ここには、たとえば月が湖面に映っているような現象がある。湖面において月があり、月において湖面がある。月は濡れず湖面は破れず、共にその存在を称えている。東田は語る。

僕たちは光を見ている時、なぜか自分も光になっているのです。自分が光になって光の粒を体に取り込んだり、粒の中に入ったりして光と遊ぶのです。

光の中にいるだけで僕はとても幸せで、心が充たされるのです。[27)]

東田は光を光として見てはいない。光は対象でも、何かの物を見るときの照明でもない。東田は光そのものにふれる。ふれるということは見ることではないので、大きく目を見開くことはない。目を見開けば光はまぶしいものになる。東田には、意識して見る以前に光は現れてふれている。自然もそうである。東田は語る。

僕には、人が見えていないのです。

人も風景の一部となって、僕の目に飛び込んでくるからです。山も木も建物も鳥も、全てのものが一斉に、僕に話しかけてくる感じなのです。それら全てを相手にすることは、もちろんできませんから、その時、一番関心のあるものに心を動かされます。[28)]

東田の手記には、自然、青い空、海、山、星、雪、風、雨、雲、虹、砂、水、樹木、草花、鳥、昆虫、魚、イヌ、ネコなどのことばがある。これらはいずれも語りかけるものとして現れる。東田はその語りかけにふれる。ふれるは、言葉で聞くというのではなく、耳目にふれるというように、意識して知覚する以前の根源的関わりの現象である。会話のできない東田において、自然との根源的な関わりとしての対話は可能である。ここには、かの湖面とそこに映る月のように、無言のなかに、むしろそうであるからこそ、平穏な安らぎがある。東田が、自然の中に安心を求めるのは諾うことが

できる。

東田にとって、安心をうむものは自然だけではない。普段の生活のなかにも自然と同じように安心をうむものがある。それは回るものである。風車、くるくる回るボール、自動車や自転車の回転する車輪、自分の身をくるくる回すこと、などである。東田は語る。

自分がくるくる回るのが好きだし、何でもかんでも回しては喜んでいます。

回っているもののどこが楽しいのか、分かりますか？

僕たちから言わせると、それは見ているだけでどこまでも続く、永遠の幸せのようなものです。

見ている間、回転するものは規則正しく動き、何を回してもその様子は変わりません。

変わらないことが心地よいのです。

それが美しいのです。[29)]

回るものは、東田の前に魅惑するかのように現れる。東田は、それを見るのではなく、それに招かれ、ふれる。ふれることにおいて、東田自身も回るものとなる。回るということは円をうむことである。円は外に向かって働きかけず、刺も角もない。円は回っているとしても、方向づけがなく、緊張がない。むしろ、無力かつ弛緩がある。円は内向性であり、矛盾のない、完結され、満たされた、輪の和、柔和、豊かさ、平安、円満、永遠、美を現す。美は、自然にあふれている。とりわけ花がそうである。花は、いずれも左右対称で、円の中に収まる。東田ならずとも、円が人びとに安らぎを与える所以がここにある。この安らぎは、生命の根源的なものに関わっている。ちなみに、ボイテンディクはこう語っていた。

その中で人間的なものは生命そのものの根源へと、すなわち成長、偽の内在、約束、豊饒以外の何ものでもない、植物へと回帰するのである。――働かず、悩むことなく、完全な美の中に現象する野の百合のように。[30)]

東田は、回るものが「永遠の幸せのようなもの」を生み、「それが美しい」という。東田にとって、円は永劫回帰の象徴である。

だが、東田は回ることだけではなく、くりかえすことにも引き寄せられる。水道の蛇口の栓を開けたり閉めたり、本のページを開いたり閉じたり、ボールを右手から左手に、左手から右手にもちかえること、などをくりかえす。東田は語る。

自閉症の人が繰り返しを好きなのは、自分のやっていることが好きだとか、楽しいからではないのです。

すごく好きでも、普通あんなに繰り返せるものではありません。僕らは繰り返すことを、自分の意志でやっているわけではないのです。

たぶん、脳がそう命令するのです。

それをやっている間は、とても気持ち良くすごく安心できます。[31)]

東田において、自然や回るものに招かれ、それにふれ、ひたるとき、幸せがある。そのため、自然や回るものが好きで、それにふれることは楽しいという。これに対して、くりかえすことは東田の身体、とくに手を使ってくりかえす行為である。くりかえしも単調な行為であって、キャッチボールのように技量を高めるものではない。東田はボールを握って投げることはないので、キャッチボールはできないという。いったい、水道の蛇口の栓や本のページ、ボールが、くりかえすよう求

めているのであろうか、そうであれば対話的関係が現れるはずである。たしかに、水道の蛇口の栓や本のページは開いたり閉じたりするもの、ボールはやりとりするものとして現れる。1～2歳の幼児には、こうした単純な行為がよく見られる。手もとにある絵本のページを開いたり閉じたりするのを楽しんでいる。これは絵本が開いたり閉じたりするものとして現れ、そうなることを求めているからである。それでも、長くは続かない。面白くなくなるからである。

東田は好きだとか、楽しいから、くりかえし同じことをしているのではないという。自然や回るものにふれるとき東田のすべてが受容され、そこにわれを忘れて生きる現象がある。これは東田の意志ではない。東田自身が導かれ、自然や回るものの世界に入る。同じように、くりかえし同じことをするのも東田の意志ではない。この場合、意志ではなく「脳がそう命令する」という。東田がくりかえし同じことをするのを受け容れていないにもかかわらず、脳がそれを強いるのだという。もちろん「それをやっている間は、とても気持ち良くすごく安心できます」というが、東田はそのことを肯定してはいない。東田はそういう安心を求めていない。それゆえ、自然にふれることは根源的な安らぎをくりかえし、これは一過性の疑似安心となる。

東田には、どうでもいいような、ささいなことでもこだわってやめないところがある。ここでも東田は語る。

> 僕たちだって好きでやっているわけではないのですが、やらないといてもたってもいられないのです。
>
> 自分がこだわっていることをやると、少しだけ落ち着きます。[32)]

東田の意志と違ったことが他人との関係でも現れる。

> してはいけないことなのに、何度注意されても同じことを繰り返してしまいます。してはいけないということは理解できても、なぜか繰り返してしまうのです。
>
> やってはいけないという理性よりも、その場面を再現したい気持ちの方が大きくなって、つい同じことをやってしまうのです。
>
> すると、頭の中が一瞬、まるで感電したようにびりっとします。その感覚はとても気持ちのいいもので、他では同じような快感は得られません。[33)]

東田は、このような快感を肯定してはいない。

> 僕も何とかなおそうとしていますが、そのためのエネルギーはかなりのものです。我慢することは、苦しくて苦しくて大変です。その時に必要なのが、周りにいる人の忍耐強い指導と愛情でしょう。
>
> 僕たちの気持ちに共感してくれながら、僕たちを止めて欲しいのです。[34)]

くりかえし同じことをする、こだわり、何度注意されても同じことをする、これらは、その時には安心、落ち着き、快感を産むが、自然や回るものにふれる安らぎとしての安心ではない。同じことをするこだわり、注意をされても同じことをするといった行為は、他者との関わりを困難にするので、他人に受け容れられない。そうした行為があるかぎり、他人の間にいる東田は不安から逃れることはできない。東田はそのことを知っている。東田にとって、こうした行為が乗り越えられなければ、安らぎとしての安心は得られない。

4. 不安の受容

東田の安心感は家族の庇護と自然によって育まれている。

僕が幸せを感じるのは、家族が仲良く笑っているときです。家族みんなで出掛けたり、遊んだりしているときが一番幸せです。

幸せ過ぎて泣けてくることもあるのです。僕は、家庭の雰囲気が温かかったり、自然の美しさに感動したりしても泣いてしまいます。[35)]

家族と自然は東田のすべてを無条件に受け容れてくれる。自然は、家族のような温かさや優しさがある。ちなみに、東田は、手のひらをひらひらさせるわけについてこう語る。

これは、光を気持ち良く目の中に取り込むためです。

僕たちの見ている光は、月の光のようにやわらかく優しいものです。そのままだと、直線的に光が目の中に飛び込んで来るので、あまりに光の粒が見え過ぎて、目が痛くなるのです。

光を見ていると、僕たちはとても幸せなのです。たぶん、降り注ぐ光の分子が大好きなのでしょう。[36)]

東田にとって光は見るものではなくふれるものである。それゆえ、目を見開くことはなかったのである。もちろん、目は人を見るためのものではない。東田の目はいつも半眼で、半ば閉じられている。手のひらをひらひらさせるのは気持ちよく光を浴びるためである。

自然は、いつでも僕たちを優しく包んでくれます。

きらきらしたり、さわさわしたり、ぶくぶくしたり、さらさらします。[37)]

もうひとつ、幸せを感じるのは回るものにふれたときであった。

僕は、池に小石を投げた時にできる波紋にうっとりしたり、時間も忘れ、走っている自動車のタイヤの回転に注目したりします……それは、僕の幸せでもあります。[38)]

東田において、家族に守られ、家族とともに自然にふれ、回るものにふれるとき、幸せを感じる。こういう幸せの体験が安心感である。この安心感が東田に生きる力を与え、勇気となっている。

東田は、特定しがたい疾患のために、他人と関わることができない。東田は会話ができず、自分が何をしでかすか分からず、人が厭がったり、迷惑に思ったりすることも抑えることが難しい。後で、自分がやったことを「知った時、いつも僕は自己嫌悪に陥ります」[39)] という。自己嫌悪以上に、そういうことがありはしないかとの不安は大きい。だが、この不安は、自閉症という症状が生むものであり、そこには疾患になんとかして対応しようとしている東田自身の姿がある。不安には東田自身の生きる姿が現れている。

東田は自分に疾患があり、それが「重度の自閉症」「先天的な脳機能障害」と呼ばれ、自分に異常な行動が現れ、そのことで生活が不自由で他の人にも迷惑をかけていることなどを知っている。知っていることが不安を生み出す。東田が何も知らなかったとしたら、不安は生まれなかったはずである。疾患を知るということは不安を生むが、それは疾患に対応しようとする姿である。「原因は、まだわかっていない」としても、疾患があることを知るとき、それは不安のみならず安堵を生み、症状を生きる力となる。ちなみに、ある高次脳機能障害者はこう語っていた。

自分のもの忘れを中心とした失敗群が私の脳の記憶機能のどこかがおかしくなったために起こることであ

ることを納得することができ、得体の知れない難病ではなく脳出血を起こしたという事実を元に、理にかなって起こっている症候群であることがわかり、自分が直面している“敵”の顔を見た安堵感があったのです。

私にとっての生きる意欲が生まれた最初は、自分の障害の名前を知ったことに他ならないと思います。[40]

高次脳機能障害者に比べると、東田の自閉症は、とりわけ得体の知れない難病といえる。だが、それでも自閉症という障害の名前を知ったとき、不安を和らげる。市川浩は「なにかわからぬものの名前を知るとほっと安心し、それだけで対象を理解したように」[41] 人は思い込むという。さらに、市村弘正はこう語っている。

命名のはたらきの一つは確実に、不安感ないし恐怖心の消去にある。……見えないもの、それゆえに神秘化されるとともに恐怖や不安をよびおこすものを、「見える」ものとすることによって恐怖心を鎮静し消去すること、それが名前の重要な働きの一つであった。[42]

東田は、現在の医学が明らかにしているかぎりでの自閉症の疾患および症状について知っている。そして、このことを文字によって人びとに語りかけている。

行動のコントロールがうまくできないこともあり、自閉症の僕のことを、いつも客観的にながめている自分がいます。

どちらも僕自身なのに、どうすることもできない状況を、もうひとりの自分が冷静に観察している感じです。[43]

東田は「どうすることもできない状況」というが、こう語るとき、状況は「冷静に観察している」もうひとりの東田の知の支配圏に組み入れられる。けだし、知るとは治(し)るもしくは領(し)ることであって、それは、感情や行動のコントロールに関わるからである。かつてスピノザは「自己の感情を抑制する人間の力は、もっぱら知性にある」[44] と語ったことがあったが、感情、妄想、狂信、衝動といえども、知性によってそれらが明晰に判明されるや否や、それらは解体される。そのかぎり、知性の認識作用もまた感情にならざるをえない。

東田は、自閉症について、それを生きる自分について書き続ける。症状のある自分を知り、他の人びとに知ってもらうためである。東田は12歳のときの手記で語る。

出来なくて恐くても、勇気を持って戦うのです。その勇気の出し方が僕には問題なのです。

自分の気持ちをゆったりともち、苦しくなった時は大丈夫だと自分に言い聞かせます。もしも、混乱しても何とかなると信じて、がまんしたいと思います。[45]

こうして、年を重ねるにつれて、身体の暴発、感情の激動も抑えられてくる。もう、以前のように、大きな混乱は現れなくなっている。東田は語る。

繰り返し失敗するのは大変ですが、あきらめることなく何度も教え続けてくれる人たちのおかげで、僕も少しずつ成長しています。[46]

しかし、それでも自閉の症状は続き、不安が収まることはない。東田は症状が生み出す不安を生きようとする。その手記（22歳）は語る。

人は誰でも、自分の進む道が不安で仕方ないのだと思います。

重度の障害者は、何もできない人間に見られがちですが、実は強靭な精神力を持っている人も多いような気がします。[47]

ここには、症状を自分のものとし、不安を受け容れる姿がある。「人は誰でも」、死の不安はいうまでもなく生きているかぎり、何かの不安を生きている。これは、自閉症のある人も、健常な人も同じである。東田は自閉症という症状を受け容れる。

障害を抱えて生活することは大変ですが、自閉症で良かったと思えることもたくさんあります。[48)]

日々の生活を生きるうえで、東田に不安が解消されることはない。しかし、自閉症という症状を自然のこととして受け容れて生きるとき、不安は乗り越えられる。けだし、不安を生きることが、自分が生きることであるからである。これが、東田が幾多の苦しみを経て辿りついた世界である。

むすび

自閉症という症状は、ある疾患を原因としているが、疾患そのものではない。この症状はあくまで、疾患に立ち向かい、生きようとする人の姿である。生きようとするがゆえに、不安が現れる。この不安もまた、疾患に立ち向かう姿である。この不安と安心感や安らぎを求めることとは表裏の関係にある。東田は安心感を求めている。さらに、このことが不安を生み出す。これを乗り越えるには異常な行動の抑制を必要とする。東田は、その抑制が、母親に教えられたことばによって進んでいる。しかし、それは完遂されることはない。疾患は治らず、行動の不安は消えることはない。ここで、東田にはひとつのパラドックスが現れている。それは、不安を受け容れ、不安を生きることである。このとき、不安は生きるよすがとなる。これは、究極には自閉という症状を受け容れ、それを生きるということである。東田において、不安への対応はこのようなパラドックスにおいて安心を生み、日々の安らぎに至る。

注および引用文献

1）東田直樹の手記については、中野桂子「笑顔の蘇生－自閉症の子どもの現象学的考察－」『人間と医療』第8号、2018年、41～42頁を参照。
2）東田直樹『続・自閉症の僕が跳びはねる理由』エスコアール出版部、2010年、18頁。
3）東田直樹『自閉症の僕が残してきた言葉たち』エスコアール出版部、2008年、3頁。
4）東田直樹『自閉症の僕が跳びはねる理由』エスコアール出版部、2007年、72頁。
5）東田直樹、同上書、118頁。
6）東田直樹、同上書、72頁。
7）東田直樹、同上書、54頁。
8）A. ポルトマン『人間はどこまで動物か』高木正孝訳、岩波書店、1984年、30頁。
9）M. J. ランゲフェルド『教育の人間学的考察』和田修二訳、未来社、1966年、90頁。
10）O. F. ボルノウ『教育を支えるもの』森昭・岡田渥美訳、黎明書房、1969年、51頁。
11）J. H. ヴァン・デン・ベルク『疑わしき母性愛』足立叡・田中一彦訳、川島書店、1981年、114頁。
12）B. Russell, *On Education*, Unwin Books, London, 1973, p.55. 1st ed., 1926.
13）B. Russell, *The Conquest of Happiness*, Unwin Books, London, 1961, p.114. 1st ed., 1930.
14）東田直樹・東田美紀『この地球（ほし）にすんでいる僕の仲間たちへ』エスコアール出版部、2005年、79～80頁。

15）東田直樹、同上書、79～83頁。
16）S. フロイト『精神分析入門』懸田克躬訳、中央公論社、1966年、473頁。
17）東田直樹、『自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、72頁。
18）東田直樹、同上書、134頁。
19）東田直樹、『続・自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、62頁。
20）東田直樹、『自閉症の僕が残してきた言葉たち』前掲書、22頁。
21）東田直樹、同上書、22頁。
22）木村敏『時間と自己』中央公論社、1982年、142頁。
23）東田直樹『跳びはねる思考』イースト・プレス、2014年、102頁。
24）東田直樹、『続・自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、15～16頁。
25）なおき・さく／れいこ・え『自閉というぼくの世界』エスコアール、2004年、13頁。
26）東田直樹、『自閉症の僕が残してきた言葉たち』前掲書、50頁。
27）東田直樹、『この地球にすんでいる僕の仲間たちへ』前掲書、55頁。
28）東田直樹、『跳びはねる思考』前掲書、29頁。
29）東田直樹、『自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、90頁。
30）F. J. J. ボイテンディク『女性』大橋博司・斎藤正己訳、みすず書房、1978年、210頁。
31）東田直樹、『自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、124頁。
32）東田直樹、同上書、128頁。
33）東田直樹、同上書、126頁。
34）東田直樹、同上書、127頁。
35）東田直樹、『続・自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、97頁。
36）東田直樹、『自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、92頁。
37）東田直樹、同上書、114頁。
38）東田直樹、『跳びはねる思考』前掲書、61～62頁。
39）東田直樹、『自閉症の僕が跳びはねる理由』前掲書、55頁。
40）山田規畝子『高次脳機能障害者の世界』協同医書出版社、2009年、v ～ vi 頁。
41）市川浩『〈身〉の構造』青土社、1984年、18頁。
42）市村弘正『「名づけ」の精神史』みすず書房、1989年、13～14頁。
43）東田直樹、『跳びはねる思考』前掲書、69頁。
44）B. de スピノザ『倫理学』高桑純夫訳、河出書房新社、1966年、261頁。
45）東田直樹、『この地球にすんでいる僕の仲間たちへ』前掲書、50頁。
46）東田直樹、『跳びはねる思考』前掲書、198頁。
47）東田直樹、同上書、201～202頁。
48）東田直樹、同上書、190頁。

（なかの　けいこ：人間科学科　初等教育・保育専攻　准教授）